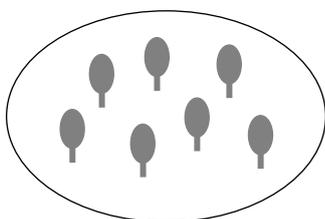


翻訳と聞き手・読み手の視点——共同注意を軸とした日独語対照研究

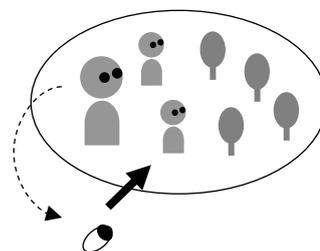
大藪正彦（島根大学）

1. はじめに——言語化されない主体（見えない自己）

- (1) a. 今は武蔵の国になりぬ。（更級日記）  
 b. Jetzt waren wir in der Provinz Musashi. (U. Kemper 訳)  
 (2) a. まづ高館にのぼれば、北上川、南部より流るる大河なり。（芭蕉「おくのほそ道」）  
 b. Wir stiegen zuerst auf den Takadachi-Hügel, wo wir den Kitakami-Fluß betrachten konnten, der aus der nördlich gelegenen Nambu-Gegend kommt. (G. S. Dombrady 訳)

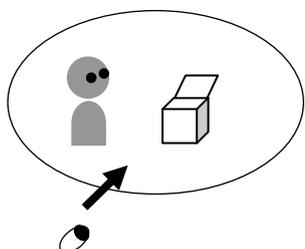


【図 1】「今は武蔵の国になりぬ。」  
 （自己中心的な視点）

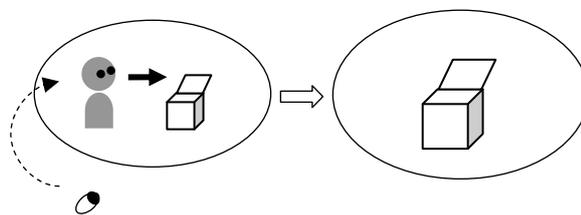


【図 2】„Jetzt waren wir in Musashi.“  
 （自己分裂）

- (3) a. [Und nun öffnete er das Paket ...] Er fand großartige Sachen darin: ... (E. Kästner: *Das fliegende Klassenzimmer*)  
 b. すばらしいものがはっていました。（高橋健二訳）  
 c. 中には、すばらしいものがはっていました。（山口四郎訳）  
 d. なかには、すばらしいものがつまっていた。（若松宣子訳）  
 e. すばらしい物が詰まっていた。（丘沢静也訳）  
 f. すごいものがはっていた。（池田香代子訳）



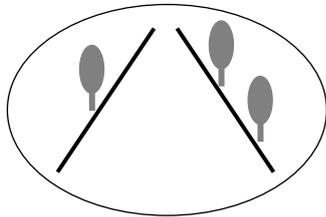
【図 3】„Er fand großartige Sachen darin.“  
 （客観的な視点）



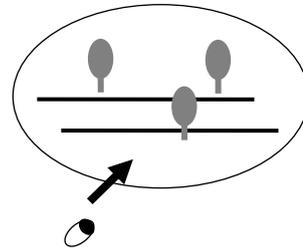
【図 4】「すばらしいものがはっていました。」  
 （自己投入）

## 2. 聞き手・読み手の振る舞い——客観的な読みと自己投入的な読み

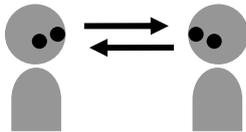
- (4) a. くまは、あるきだしました。森をぬけ、川べりの土手にのぼると、草はあおあおとしげり、川はきらきらひかっています。 (湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
b. Der Bär machte sich auf den Weg. Er ging durch den Wald und kletterte eine Böschung hinauf. Dahinter wuchs dichtes Gras und ein Bach glitzerte. (U. Gräfe 訳)
- (5) a. <sup>このみち</sup> <sup>ゆくひと</sup> 此道や行人なしに秋の暮 (芭蕉)  
b. Diesen Weg  
geht niemand  
an diesem Herbstabend. (D. Krusche 訳)



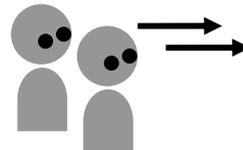
【図5】「この道や行く人なしに…」  
(自己投入的な読み)



【図6】„Diesen Weg geht niemand …“  
(客観的な読み)

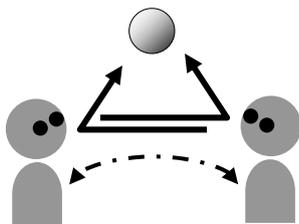


【図7】目が合う



【図8】いっしょに見る (≠同時に見る)

## 3. 共同注意 (Joint Attention)



【図9】典型的な共同注意場面

### 3.1 事例

#### ● 無助詞

「ハ」 — 聞き手の注意がすでに向いている対象を題目として提示することにより、その対象に対する〈共同注意〉を確立する。

無助詞 — 聞き手の注意が向いていない対象を題目として提示することにより、その対象に聞き手の注意を向けて〈共同注意〉を確立する。 — 池上／守屋 (2009)

- (6) a. 「ねえ、これ素敵なシャツでしょう？」とレイコさんが言った。(村上春樹「ノルウェイの森」)  
b. „Ist das nicht eine schicke Bluse?“ fragte sie mich. (U. Gräfe 訳)
- (7) a. 「あつ、これはなぞなぞじゃないよ。」(吉本ばなな「キッチン」)  
b. „Keine Angst, das soll kein Rätsel sein.“ (W. E. Schlecht 訳)

#### ● 「ノダ」<sup>1</sup>

「ノダ」 — 〈共有されている知識・状況に関連する、未共有の付加的な情報を補う〉ときに「のだ (んです)」を使う。 — 菊池 (2000)

— 「ノ」の使用によって「イマ・ココの〈見え〉」が談話に持ち込まれる。適切な使用と理解のためには、聞き手の〈共同注意〉と協調的な行動を前提とする。同時に、話し手の側からの聞き手への配慮も重要 — 池上／守屋 (2009)

- (8) a. ある朝、くまは ないていました。なかよしのことりが、しんでしまったのです。  
(湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
b. Eines Morgens weinte der Bär. Denn sein Freund, der kleine Vogel, war gestorben. (U. Gräfe 訳)
- (9) a. 「町から町へと旅をして、バイオリンをきいてもらうのがぼくのしごとなんだ。…」  
(湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
b. „Ich zeihe von Ort zu Ort. Mein Beruf ist es, anderen auf der Geige vorzuspielen. …“ (U. Gräfe 訳)



<sup>1</sup> バリエーションとして、ンダ、ノデス、ンデス、ノ、など。疑問文では、ノカ、ノデスカ、ンデスカ、ノ、など。

● 終助詞「ネ」「ヨ」「ナ」

「ネ」	— 同じモノ・コトの認識や表出に共に目を向け共に眺めること (= 〈共同注意〉) を求める。
「ヨ」	— 〈共同注意〉を目指して、聞き手の注意を話し手の注目するモノ・コトに振り向ける。
「ナ」	— 〈共同主観的〉態度を前提として聞き手が関心を寄せることを期待しつつ表出し、かつ具体的な〈共同注意〉は求めない。 —— 池上/守屋 (2009)

- (10) a. 「ねえ、ことり。きょうも『きょうの朝』だね。きのうの朝も、おとといの朝も、『きょうの朝』って思ってたのに、ふしぎだね。…」(湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
 b. „Weißt du, kleiner Vogel“, hatte er gesagt, „heute ist heute, aber gestern und vorgestern haben wir auch heute gesagt. Ist das nicht seltsam? ...“ (U. Gräfe 訳)
- (11) a. 「ぼく、れんしゅうするよ。おどりながら、タンバリンをたたけるようになりたいな」(湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
 b. „Ich werde üben. Ich möchte das Tamburin schlagen können und vielleicht kann ich dann auch dazu tanzen.“ (U. Gräfe 訳)

● 情報のなわ張り

日本語		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

ドイツ語		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接形	C 間接形

【表 1】情報のなわ張りと言形式 (神尾 1990; Ueki 1993 も参照)

- A (12) a. (私は) 頭が痛い。  
 b. Ich habe Kopfschmerzen.
- B (13) a. いい天気だね。  
 b. Es ist schönes Wetter.
- C (14) a. (君は) 疲れているみたいだね。  
 b. Du wirkst müde.
- D (15) a. 明日はとても寒くなるらしいよ。  
 b. Morgen soll es sehr kalt werden.

● 感動詞とあいづち

〈共同主観性〉を前提とし、

「あ！」 — 〈見え〉を認知し表出

「おっ！」 — 〈共同注意〉態勢にある他者が〈見え〉を認知し感情を表出

「ん？」 — 別の他者が〈見え〉を認知できないことを表明

「ぎゃあ〜！」 — 〈見え〉を認知し感情を表出

「えっ？」 — 新たな事態を認知し感情を表出 ——— 池上／守屋 (2009)

- (16) a. 「あ」山下が、空を見上げた。「雨だ」(湯本香樹実「夏の庭」)  
 b. „Ach nein!“ Yamashita schaut zum Himmel hinauf. „Es regnet!“ (Yoko Koyama-Siebert 訳)
- (17) a. あれ！？ ゆきが ふって ないよ！ / 「ママ、ママ、そとに いて いい しょ。  
 ゆき やんでるよ。」(酒井駒子「ゆきがやんだら」)  
 b. „Guck mal! Es hat aufgehört!“ / „Mama, Mama, jetzt darf ich doch raus?“ (U. Gräfe 訳)

4. おわりに——異なる言語・文化の理解のために

● 独り言？

(18) a. あ、人が倒れている。

b. Hier liegt jemand. ——— 清野／山田 (2011: 12)



● 相手の目を見ない日本人？

**Rita Menge (2009): Praxisführer Japan**

Achten Sie Ihren Blickkontakt; zu langer Blickkontakt wirkt auf Japaner mitunter beängstigend. (75)

● お尻を向ける日本人？

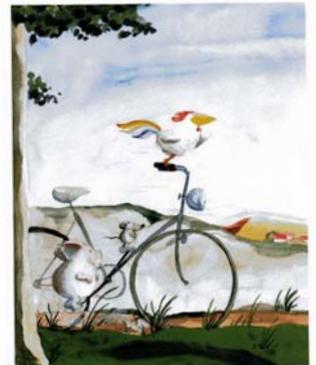
**大谷／大谷 (2010): „Wie kommt man zu seinem Platz, wenn man zu spät kommt?“**

... wenn man es sich genau überlegt, ist es für die Sitzenden wirklich nicht sehr angenehm, das Gesäß der Spätkommenden direkt vor dem Gesicht zu haben. Also in Zukunft: Gesäß zur Bühne bitte. (54)

● 誤訳？

(19) a. Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie fuhren nach Hause. (H. Heine: *Freunde*)

b. いつのまにか かげが ながくなった。3びきの せたけよりも ほら こんなに。さあ うちへ かえろう。(池田香代子訳)



## 出典

- Heine, Helme: *Freunde*, Weinheim: Beltz & Gelberg. 1982 (Neue Rechtschreibung). (『ともだち』池田香代子訳, ほるぷ出版, 1996.)
- Kästner, Erich: ‘Das fliegende Klassenzimmer’, in: *Gesammelte Schriften, Bd. 7*, Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1959 [Original 1933]. (『飛ぶ教室』高橋健二訳, 岩波書店, 1962; 山口四郎訳, 講談社, 2003 [1983]; 若松宣子訳, 偕成社, 2005; 丘沢静也訳, 光文社, 2006; 池田香代子訳, 岩波書店, 2006.)
- 村上春樹『ノルウェイの森』講談社文庫. 1991. (*Naokos Lächeln*, übers. v. Ursula Gräfe. Köln: DuMont. 2001.) 「おくのほそ道」=『ビギナーズ・クラシックス おくのほそ道 (全)』角川学芸出版, 2001. (*Auf schmalen Pfaden durchs Hinterland*, übers. v. G. S. Dombady, Mainz: Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung, 1985.)
- 酒井駒子『ゆきがやんだら』学研教育出版, 2005. (*Es schneit!*, übers. v. Ursula Gräfe, Frankfurt a. M.: Moritz Verlag. 2006.)
- 「更級日記」=『ビギナーズクラシックス 更級日記』角川学芸出版, 2007. (*Sarashina-Nikki. Tagebuch einer japanischen Hofdame aus dem Jahre 1060*, übers. v. Ulrich Kemper, Stuttgart: Reclam, 1966.)
- 吉本ばなな『キッチン』角川書店. 1998. (*Kitchen*, übers. v. Wolfgang E Schlecht. Zürich: Diogenes. 1994.)
- 湯本香樹実『くまとやまねこ』河出書房新社, 2008. (*Der Bär und die Wildkatze*, übers. v. Ursula Gräfe, Frankfurt a. M.: Moritz Verlag. 2009.)
- 湯本香樹実『夏の庭——The Friends』新潮社, 1994. (*Gespenserschatten*, übers. v. Yoko Koyama-Siebert, Zürich: Nagel & Kimche, 1995.)

## 文献

- 浜田寿美男 (1999): 『「私」とは何か——ことばと身体との出会い』講談社.
- Hinds, John (1987): ‘Reader Versus Writer Responsibility’. In: Connor, Ulla/Kaplan, Robert B. (eds.): *Writing across Languages*. Reading, MA: Addison-Wesley, 141-152.
- 本多啓 (2003): 「共同注意の意味論」山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 2』ひつじ書房, 199-229.
- 本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論——生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- 本多啓 (2011): 「共同注意と間主観性」澤田治美 (編): 『主観性と主体性』ひつじ書房, 127-148.
- 池上嘉彦 (2011): 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編): 『主観性と主体性』ひつじ書房, 49-67.
- 池上嘉彦/守屋三千代 (編) (2009): 『自然な日本語を教えるために——認知言語学をふまえて』ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1990): 『情報のなわ張り理論——言語の機能的分析』大修館書店.
- 金谷武洋 (2004): 『英語にも主語はなかった——日本語文法から言語千年史へ』講談社.
- 菊池康人 (2000): 「「のだ (んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, 25-51.
- 熊倉千之 (2011): 『日本語の深層——〈話者のイマ・ココ〉を生きることば』筑摩書房.
- Krusche, Dietrich (Hg.) (1994): *Haiku. Japanische Gedichte*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Menge, Rita (2009): *Praxisführer Japan. Fettnäpfchen gekonnt vermeiden*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- 森田良行 (2006): 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房.
- 尾形仍 (編) (2000): 『新編 俳句の解釈と鑑賞事典』笠間書院.
- 大谷弘道/大谷ウルズラ (2010): 『新 ドイツ語読み方教室——中級表現練習読本』三修社.
- 大藪泰 (2004): 『共同注意——新生児から2歳6か月までの発達過程』川島書店.
- Ozono, Masahiko (2008): ‘Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in kontrastiver Sicht’. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
- 清野智昭/山田敏弘 (2011): 『日本語から考える！ ドイツ語の表現』白水社.
- Ueki, Michiko (1993): ‘Problematik bei der Übertragung von deutschen und japanischen Fachtexten’. In: Frank, Armin Paul u.a. (Hg.): *Übersetzen, verstehen, Brücken bauen*. Berlin: Erich Schmidt, 228-236.